

博士論文要旨

本会の佐藤美希会員が2007年10月に以下の博士論文を北海道大学に提出、博士号を授与されました。以下にその概要を紹介します。

論文題目： 英文学翻訳の「翻訳規範」に関する一考察

— 『英語青年』誌に見られる英文学研究及び社会思潮との関係から

英文題目： The Academic and Socio-cultural/Socio-political Context of Norms for English Literary Translation in Japan: Analysis of discourses on translation in *Eigo-Seinen*

提出機関： 北海道大学

提出者： 佐藤美希

指導教授： 橋本尚江教授

提出年月： 2007年10月

英文要旨： Within the history of English literary translation in Japan, academics of English Literary Studies have constructed norms governing these translations by producing and critiquing translations as well as by conducting research into English literature. In addition, Japan's academia of English literary studies has been developed under the socio-cultural/socio-political interest in striving for being comparable to the West. Thus, English literary translation in Japan is characterised by the fact that academia underpinned by social context has played a role of essential determiner of translation norms.

Applying the notion of translation norms conceptualised by Toury, this paper introduces some modification with a greater focus on socio-cultural/socio-political aspects in order to reach a comprehensive understanding of the situation of literary translation in Japan. In order to describe translation norms the paper examines discourses on English literary translation published in a journal *Eigo-Seinen* chronologically. It then analyses how those norms were intertwined with academic norms and the socio-cultural/socio-political context in Japan. Through these analysis, it is pointed out that there have been three major 'negotiations' of translation norms since the Meiji era, and each shift from one negotiation to another was brought about by the change of academic norms and socio-cultural/socio-political trend.

和文要旨

序章

本論文の研究課題は、明治以降の英文学翻訳においていかなる翻訳規範が形成され

ていたのかについて、英文学研究及び社会思潮という翻訳のコンテキストとの関連から系譜学的に明らかにすることである。

日本の英文学翻訳は、英文学研究者による作品研究・日本語訳・日本語訳への批評や翻訳論という一連の英文学研究行為の中に位置づけられている。また英文学研究自体、それを取り巻く社会・文化状況と決して無関係ではなく、その社会文化的思潮は英文学翻訳規範の形成にも反映されると考えられる。

Translation studies において翻訳の社会文化的コンテキストを重視する視座が定着している一方で、従来の日本の翻訳論の多くは言語・異文化変換や文学性の影響というテキスト上の問題の考察を中心に据えてきた。時代や社会性に着目した研究であっても、文明開化という大きな問題を内包した明治期の考察が主である。本論文ではこうした先行研究を踏まえ、翻訳とそのコンテキストである英文学研究と社会思潮との関係に焦点を絞り、先行研究ではまだ本格的に分析されていない明治から昭和までの長期に渡る通時的な翻訳規範の変化を跡づけた。

本論文の主な考察対象は、英文学研究における主要な学術雑誌である『英語青年』である。『英語青年』は明治31年の創刊から現在まで続く月刊誌で、英語英文学の研究者達が執筆・購読する代表的な学術雑誌として知られている。この雑誌には英文学研究の論考だけでなく、英文学翻訳の書評や研究者の翻訳論が頻繁に掲載されており、この雑誌の言説の考察から明治以降の英文学翻訳規範及び英文学研究規範の変化を比較考察できる。明治31年の創刊以前の翻訳観と英文学研究の関連については、複数の翻訳書に附された序文を考察の対象とした。

具体的な考察の手順は次の通りである。

- 1) 各時代・時期毎の『英語青年』誌を中心に英文学翻訳に関わる言説を考察し、英文学翻訳規範を抽出する。
- 2) 1と同時期に『英語青年』に掲載された英文学研究をめぐる言説の考察から英文学研究の規範を抽出し、英文学翻訳規範と比較考察する。
- 3) 1～2の考察を当時の時代状況・社会思潮との関連からも考察し、各時期・時代の翻訳規範の内容と当時の社会文化的思潮との関連を指摘する。
- 4) 1～3の考察を明治期から通時的に繰り返し、英文学翻訳規範の変化を英文学研究と社会文化的思潮との関連から通観する。

第1章 翻訳研究 (Translation Studies) と翻訳規範論

本章では、本論文が依拠する枠組みとして、J. S. Holmes が記述的翻訳研究(DTS) の内容のひとつに取り上げた翻訳の 'Function' (=目標文化の社会・文化的要素と翻訳との相関関係) という視点 (Holmes, 1972/2000: 177; Toury, 1995:11)、および Gideon Toury による翻訳規範 (Translation norms) (Toury, 1995; 1999) の概念について検討した。

翻訳規範については、本論文で考察する日本の英文学翻訳状況に応用するために、Toury の概念を援用しながら、社会文化的な規範として独自に二種類の概念提示を行

った。第一は、起点文化と目標文化の関係によって、社会全体の何らかの要請や影響（政治的な要素も含めて）が翻訳の方向性を規定する「社会関連の翻訳規範」である。第二は外国文学受容に伴う規範で、文学の受容全般や外国文学研究の在り方が翻訳の方向性を規定する「文学関連の翻訳規範」である。Toury は訳出の際の具体的な言語形式に関わる規範 (operational norms) 等も設定しているが、本論文においては、翻訳と英文学研究・社会思潮との関連を明らかにするという研究課題に基づいて、上述した二つの社会文化的な機能を持つ規範のみを考察対象とし、『英語青年』記事分析によるこの規範の抽出を試みた。

第2章 明治・大正期の英文学翻訳、英文学研究、社会思潮

明治初期の英文学翻訳状況においては、社会全体の文明開化という潮流を反映し、日本人読者が即座に西洋の思想を理解できるような、自由訳や極端な受容化のストラテジーが支配的であった。

しかし、明治 18~21 年に発表された『繫思談』や森田思軒「翻訳の心得」において、原文一字一句の精確な直訳を主張する新たな翻訳観が提起され、従来の翻訳規範に変化が見られ始めた（吉武 1968、Kondo and Wakabayashi, 1998）。この背景には、明治 20 年頃の英文学研究体制の制度的出発に伴い、原文を精確に理解しようとする研究者達の翻訳観が実践・言及されるようになり、それが「文学関連の翻訳規範」として英文学翻訳の方向性を規定し始めたという状況があった。また、当時の社会の文明開化を求める思潮も、西洋文化を闇雲に受容するだけではなく、精確な理解によって新たな日本の進むべき道を模索すべきという姿勢に次第に変化していた。こうした社会全体の動きも、極端な受容化ではなく精確な翻訳の必要性を生じさせた背景として挙げることができる。社会の要請が英文学翻訳にも反映されていたという点では、新たな「社会関連の翻訳規範」が機能していたと考えることもできる。このように、自由訳が支配的だった状況に対して直訳の必要性が主張され、翻訳規範が変化しはじめたこの明治 20 年前後は、英文学翻訳規範における顕著な「交渉」が見られた時期であった。

明治後半は、社会全体が条約改正や日清・日露戦争を通して西洋列強に比肩することを強く意識した時期だが、その姿勢が英文学研究の在り方を牽引し、西洋列強の思想そのものを享受するための英文学研究が求められ、そのために原典への精確さ・忠実さが翻訳規範として機能していた。社会思潮が研究に反映し、さらに翻訳規範にも投影されたという点で、この時期は「社会関連の翻訳規範」と「文学関連の翻訳規範」が共通の性質を持って翻訳の方向性を規定していた。

大正期の『英語青年』では、英文学研究の発展を背景に、明治後半に構築された翻訳規範がさらに強化されている状況が示されている。ただ明治と比較すると、英文学研究が常に社会思潮と同調するという状況ではなく、翻訳規範の背景としては英文学研究の影響力が顕著になっている。その点では、「社会関連の翻訳規範」が明治期のような大きな影響力を持って機能していないことが窺われた。

第3章 昭和前半の英文学翻訳、英文学研究、社会思潮

昭和の当初は一字一句に忠実で精確であるべしとする明治後半に確立されていた既存の支配的翻訳規範を踏襲していた。しかし、次第に「原文への忠実と精確な理解」という支配的翻訳規範の再生産だけではなく、それとは全く異なる方向性、すなわち翻訳における解釈や芸術性をいかに再構成するべきかを重視する方向性が提示され始めた。この対照的な翻訳観は、特に昭和8、9年に多くの翻訳論が発表されて以降10年代を通じて頻繁に議論され、この時期を翻訳規範の「交渉」と見なすことができる。

この「交渉」の背景には、当時の英文学研究規範も「交渉」され、受動的な教養や鑑賞態度を脱して学究的な姿勢が主張されたこと、さらに英米の文学批評の積極的な導入により単に忠実な原典理解だけではなく、作品の芸術性や文学の本質といった観点を視野に入れ始めたという状況があった。その意味では、英文学研究規範の変化が「文学関連の翻訳規範」をめぐる交渉を生み出したと言えよう。

もうひとつの背景としては、当時の英文学研究は、英米との戦争という時勢の影響下で、自らの存在意義を単に起点文化追随の性質に求めるのではなく、敵国たる英米の文学と対等に向き合う姿勢を主張するようになっていた。この姿勢が一方では日本人でも遜色なく起点文化におけるのと同様の精確な作品理解が可能であって、翻訳もそれを反映すべきという翻訳観を生み、他方ではそうした英米を優れたものと見なす姿勢を脱し、日本人翻訳者が原典の芸術性や文学性を再構成することを良しとする翻訳観につながった。つまり、対照的な翻訳観の「交渉」も、同一の社会思潮に呼応した研究姿勢から生じたものであり、「社会関連の翻訳規範」をめぐる「交渉」と考えることができる。

第4章 昭和後半の英文学翻訳、英文学研究、社会思潮

第二次大戦直後は、民主主義をはじめとする戦勝国の思想を積極的に取り入れんとする社会のニーズを反映し、原典の精確な再生という翻訳規範が再び構築されていた。この状況は明治のそれと酷似しており、戦後の社会状況が「社会関連の翻訳規範」として英文学の翻訳を規定していたことがわかる。

昭和20年代後半は占領終結を機に、社会においては終戦直後の盲目的な起点文化志向が見直され、研究においては起点文化同様の研究姿勢を追究する上での限界を認識したことを反映し、厳密で精緻な作品理解を求める姿勢よりも、むしろ研究者の感受性や批評眼といった主観的な性質が強調されるようになった。こうした言わば英文学研究規範の変化が英文学翻訳にも反映され、「忠実・精確」を求める翻訳規範においてもテキスト変換上の精確さだけではなく、「作者への共感」といった主観的な視点が介入するようになっていた。こうした状況からは、「社会関連の翻訳規範」と「文学関連の翻訳規範」が常に同じ方向性を共有しながら、英文学翻訳観を規定していたと言える。

30年代になると、英文学研究との関連が堅固であった英文学翻訳に対して、「一般読者のための翻訳」というまったく新たな観点が導入され始めた。それ以降、翻訳は

「研究のための」か「一般読者のため」という観点が対置されて論じられるようになり、明治や昭和前半とは異なる新たな翻訳規範の「交渉」の様相が現れた。この「交渉」の背景には、一方では厳密な研究姿勢か文学的な感受性を重視する姿勢かをめぐる20年代後半以降の研究規範の交渉に示される研究規範の不安定化と、他方では高度成長期とともに大学が大衆化した結果、一般読者と乖離した英文学研究の在り方が強調され、さらに両者の乖離が進んだ状況が考えられる。40年代もこの「交渉」は継続するが、一般読者という観点がさらに関心を集め、それまで英文学研究が牽引していた英文学翻訳は次第に研究から離れ、英文学研究の成果としての翻訳ではなく、体系的な技術論で対応できる、また一般読者が読みやすい、文学作品としての翻訳という観点が強調されるようになっていった。こうした当時の状況は、高度成長期の社会状況も研究規範・翻訳規範構築の背景にあったという点で「社会関連の翻訳規範」を認めることができるが、それ以上に、文学研究や一般読者の求める翻訳文学の在り方も含めた「文学関連の翻訳規範」が当時の翻訳規範として大きな役割を担っていたと言える。

終章

ここまでの考察から、明治以来の日本の英文学翻訳状況においては、明治20年前後、昭和8,9年以降、昭和30~40年代の三度にわたり、英文学翻訳規範をめぐる顕著な「交渉」があったことが、翻訳をめぐる言説を通時的に辿ることによって明らかになった。それぞれの「交渉」の様相においても、「交渉」間の変化においても、英文学研究の在り方やその規範の変化、および社会思潮の変化と並行していることが考察された。このように、明治以降昭和に至るまでの英文学翻訳規範構築は、各時代・時期における英文学研究の規範および社会思潮の在り方を反映していたことが検証された。

以上の考察を通じ、社会文化的な視座から英文学翻訳規範、英文学研究、社会思潮の三者の関連を明らかにするという本論文の目的は、一定程度達成することができたと考えている。これまで日本では翻訳をめぐる様々な問題について、テキスト論や比較文学の影響研究から多くの研究成果を得てきた。しかし、社会文化的コンテキストと翻訳の関係について、明治から昭和、現在に至る長期的な翻訳規範の系譜を考察した研究はなされてこなかった。本論文によって、英文学翻訳という限定された対象ではあるものの、そうしたこれまで不足していた部分についての研究成果も提供できたのではないだろうか。

著者紹介：佐藤美希 (SATO Miki) 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院助教。専門は翻訳研究。文学の翻訳を社会的に主題化することが現在の研究課題である。2007年3月博士号取得（北海道大学）。

連絡先：mikisato@imc.hokudai.ac.jp / miki-s.miki@nifty.com

【参考文献】(本稿の引用文献のみ)

- 吉武好孝(1968)「翻訳・翻案文学」『日本の英学 100年 明治編』208-227.
- Holmes, James. S. (1972/2000). 'The Name and Nature of Translation Studies' reprinted in L. Venuti (ed.) *The Translation Studies Reader*. London: Routledge. 172-85.
- Kondo, M., and Wakabayashi, J., (1998). 'Japanese tradition' In Baker (ed.) *Encyclopedia of Translation Studies*. London: Routledge. 485-494
- Toury, Gideon. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Toury, Gideon. (1999). A Handful of Paragraphs on "Translation" and "Norms," In Schäffner (Ed.), *Translation and Norms*, Clevedon: Multilingual Matters. 9-31